佛印紀行の一節

――ユエよりツーラン・フェフォへ――

藤原利一郎

小篇は去る一月中旬より二月上旬にかけ、日佛印文化交換教授梅原末治博士に隨つて佛印を旅行した際の紀行の一節である。今掲出に當り若干の補訂を施した。

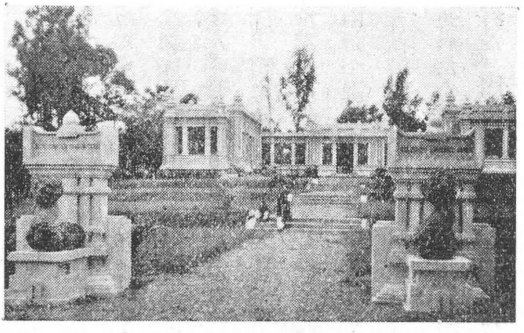
○

一月廿二日　朝圖書館等を見學して憩ふ暇もなくホテルを出發、河面副領事の車に乘せて貰つて順化驛に向ふ。十時半の發車豫定に遲れないためにである。驛で理事長官の官邸に宿つてゐられた梅原先生及びハノイから案内役について來たギルミネ氏（ハノイ・フィノー博物館長）と落ち合ふ。十時四十分、やつと我々の汽車が到着。サイゴン行の急行であるが、これ位の延着は延着の中に入らぬのである。驛頭には過去三日に亘り王宮・帝陵・博物館等、順化の内外各所を案内說明してくれたソニー氏（順化啓定博物館長）も姿を現はす。見送りの河面副領事、ソニー氏等に禮を述べて乘車。座席の關係で直ちに食堂車に入り、定められた卓につく。偶ゝツーランの自宅に歸るチャム考古學の老大家パルマンティエ翁のお孃さんが乘つてきて我々の卓に加はる。

汽車は十一時過ぎ漸く出發、青々とした水田の間を分けて一路東南へと走る。乘ること約一時間半、右手の安南山脈がぐつと海岸に迫つてきて、文字通り斷崖絕壁をなし、汽車は崖の横腹を縫ふ樣に進む。左手には紺碧の海が見られ、眼下には逆卷く白波が岸を洗つてゐる。實に風光絕佳である。トンネルが頗る多い。

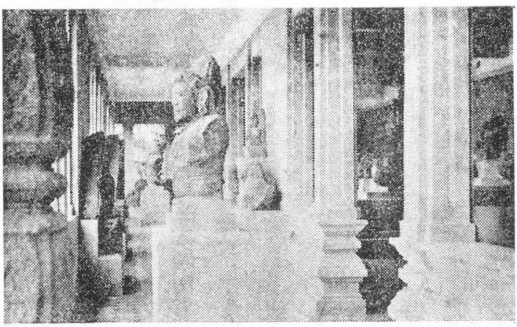
ギルミネ氏の言によると、これからツーラン迄峠を三つ越えねばならぬとのこと。線路は相當の勾配である。四、五十分程して漸く最後の峠にかゝる。これは有名なコル・デ・ニュアージュ（Col des Nuages）で、往時のチャンパ國の北境は大體この邊にあつたらしい。明命七年（西紀一八二六年）こゝに關堡が設けられ海雲關と稱し、爾來順化防禦の第一陣地となり安南人はこれを屯壹（Đồng nhứt）と稱してゐた。今もなほこの遺蹟は存するといふ。こゝを越すと廣南省でもうすつと平地である。太陽の光が急にまぶしくなり何だか夏の樣だ。暑さがやゝこたへて來る。白い砂丘が海岸一帶に續き、所々野生のサボテンが生えてゐる。

二時頃ツーランに到着。下車してパルマンティエ嬢に別れ、一同俥を傭ひホテルに向ふ。ホテルは波止場に近い河岸にあり、眺望の頗るうるはしい所である。小憩の後先づ當地の理事官を訪問。それより河岸に沿つてチャム博物館に至る。こゝは背後が樹木に圍まれ、前に綠の芝生を有するクリーム色一階の建物で、コの字形をなし、開けつ放しで、全體に非常に明るい感じである。館は前記チャム研究の大家パルマンティエ氏の名を冠し、パルマンティエ博物館とも稱し、チャム遺物の粹を蒐めてゐる點で世界的なものである。館長の阮春桐氏等の出迎へを受けて中へ入る。氏は翁のあとをついでチャム研究に精進する新進の安南人學徒、小柄な溫和しい學者である。開け放しのため室内も非常に明るく、空氣の流通がよい。陳列はチャム藝術の特色たる石彫ばかりで、第一室から第四室迄大體七世紀から十四・五世紀位迄のものが並べられてある。數はさして多くないが、何れもよいものばかりで、特に第三室は見事なものが多かつた。大體に廣南省のミソン（美山・Mĩ-son）チャキュー（茶喬 Trà-kiệu）ドン



チャム博物館の外觀

ヂュオン（桐陽 Đồng-dương）のものが多いが、兎に角西方の影響を受けたチャムの彫刻文化の往時に於ける素晴らしさ、殊に初・中期時代の彫像に現はれた力強さは、林邑以來支那安南と抗爭したチャム族の面目躍如たるものがあり、興味が深かつた。尙第一室には六七九年の廣南ミソンのサンスクリツトの石碑も見られた。全體が非常によく保存され落がきらしいものの見當らぬのは愉快である。明日ももう一度來て梅原先生は二三枚拓本をとられることゝなり、時餘に亘る興味深き見學を終へ博物館を辭去。ホテル迄數町のことではあり、夕暮のツーランの町を漫步しつゝ歸る。ツーランは兎も角近代的港灣設備を有する中部佛印唯一の港市ではあるが、町は全體に活氣乏しく、靜かな落ちついた所である。ホテルへ歸り、夜は先生に隨ひ理事官の招宴に臨む。



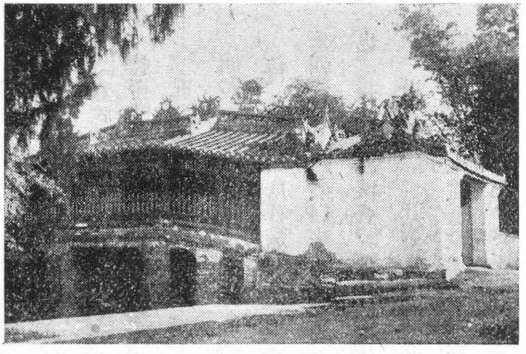
チャム博物館の内部

○

廿三日　夜來猛烈な豪雨である。眼を覺ましたのが七時、朝食をすませ先生の部屋へ行き待機。ギルミネ氏が來て、今日のミソン行きや文賢具足等の墓の見學は到底駄目だといふ。水で膝迄つかるだらうとのことまた雨季の終りで致し方もないが、順化の滯在三日間、兎に角晴天がつゞき、方々の見學に支障が無かつただけに失望の念禁じ得ない。十時頃になつてやつと雨が小降りになつたので、せめてフェフォの町だけでもと出發。車は河沿ひに博物館前へ、こゝで少し右に折れ河を離れて一路國道へと進む。フェフォ迄約三十粁だ。國道を出る頃、雨はまた猛烈に降り出して來た。道の兩側は廣々とした水田がつゞく。雨のためはつきりとは見えぬが、窓外遙か左方に突兀たる黑い山塊が見える。傍らのギルミネ氏の言によると、之が名高い大理石山（Les Montagnes de Marbre）だとか。大理

石山は五峯から成るから五行山とも言はれ、その水山の碑銘に日本人の名が見えることは既に黒板博士の紹介もあるが、こゝの訪問は後日に讓るの外ない。所々道傍に無數に土を盛り上げ小さい石塔を立てゝゐる所がある。墓地である。廣南より道をフェフォにとる。附近の濕地帶は豪雨のため全く池の樣になつてゐる所がある。之では具足の墓等行かれぬのは無理もないと思つた。

十一時頃フェフォ(會安)の町へ入る。フェフォはフェフォ川(Song Fai Fo)北岸に沿つて東西に廣がる商業都市で、中部佛印に於ける主要な華僑發展地であり、その子孫が多い所である。また昔御朱印船渡航の時代日本町のあつた所としても有名であり、當時フェフォは北方ツーランを遙かに凌ぐ大都會であつたと言ふ。間もなく車は理事官の邸の前に到着。こゝは青々と茂る熱帶樹の中に建てられたクリーム色の瀟洒な邸である。中へ入つて挨拶の後、雨の小止みを利して日本橋に向ふ。案内人が一人同乘。程なくフェフォ目貫きの通りと覺しきやゝ賑やかな通りに出る。これは日本橋通と稱され、東西に走り、その昔この邊に日本町があつたといはれるが、今は全くその遺蹟を止めない。通りの西端が日本橋だ。下車して橋を見學。橋はフェフォ川の支流にかけられたもので、幅五、六米、全長二十米位で、瓦葺きの屋根を有し、出入口に門がある。



フェフォ日本橋の外觀

渡された栞「フェフォ日本橋の歴史」を見ると曰く、「一五二四年の頃、廣南からフェフォへ官道がついてゐた。そして官道がこの急流を過ぎる所には小さい竹の歩橋がかけられてゐた。これがある洪水の時さらはれたので、當時既にこゝに居住してゐた支那商人達が、この急流の激しさを和らげ樣と、こゝに北帝(Bắc-đế)を祀るパゴードを建てることを企て、そのために金を醵出した。橋は一五二

四年に出來たが、これは支那では嘉靖年間に當り、安南では後黎の太祖(?)の時に相當する。當時フェフォにはポルトガル人・オランダ人・支那人・日本人等、多數の外國商人が住つて居り、港には彼等の大きな帆船や札克船が出入してゐたが、之等外人達は何れもこの企てに贊同し費用を醵出し、且つこの建築の技師及び請負人として日本人が選ばれた。橋は北帝を祀るパゴードと歩橋の二部より成るが、この工事は甲申の年に始められ、丙戌の年に完成した。今も橋の出入口に猿と犬の像が置かれてゐるのはこのためである。その後一五八三年明鄉社出身の Truong-Hoàng-Cô なる者がこのパゴードの修理にまた金を醵出し、一七一九年己亥の年には阮福凋がこの町を訪れ、日本橋に來遠橋の名を與へた。一八一七年、嘉隆の治世に至り、この橋が墜落したのでまたも明鄉社の住民が醵金して再建し、これが一九一八年迄維持されたが、時の理事官レステルランとT・Pの技師達が改修を加へ、自動車の通行出來る樣に强化した。」と。

この案内記の述べてゐる所、前半傳說に基づき、必ずしも信を措き難いが、この橋の東に往時日本町のあつたことを思へば、當時の在留日本人がこの建造に當り、その他相當の役割を果したことは信じてもよいであらう。門(東門)を入ると、成る程兩側に犬の土像が配置され、その隣に石碑がある。右側(東北隅)のものは「重修來遠橋記」と題し、これは嘉隆十六年(一八一七年)橋の再建に當り、社員一同が應分の寄附をしてこれに盡力し、工を竣へたことを稱したものである。銘中丁丑年とあるのは嘉隆十六年を指す。

重修來遠橋記

明香會安廣界、於錦鋪有溪焉、溪有橋、古也相傳、日本人所作經、奉
先朝宸翰、賜名曰來遠橋、夫會安廣、廣南之好風水也、長江三面浹合、賈筏商帆之所集、山陬海浹之所歸、岸上列肆、其中爲通衢、四方百貨無遠不至、此橋之所以名來遠也歟、橋上架屋、屋下列板、坦然著履平地、行者安、勞者息、游者宜乘凉、宜臨流而賦詩、皆橋間之勝槩也、方今海宇淸晏、商賈者藏於市、旅者出於途、馬跡車塵之所及、亦無遠而不過此橋焉、第成必有壞、木久朽蠹、不及辰修葺、將有濡軌之虞、於是同社員戢發、願捐產拾材、將與鼎力而

新之、以丁丑年己巳月成、徵記於某某、奮然而作曰、此文昌帝君所謂造千萬人來往之橋、亦陰隲中之善事也、而今而後將千百年、是賴其利澤、及人之功容可量耶、是爲記銘曰、

遵彼路兮　溪水溶溶　截水爲橋　豈惟前功
嗣而修之　善念所克　往來攸濟　無遠不通
而今而後　利澤無窮

嘉隆丁丑年仲秋月穀日　直隷廣南營督學溪亭丁翔甫撰

一七一九年、當時この地方を支配してゐた阮福淍が、この日本橋に來遠橋の名を與へたことは、大南寔錄にも見えて、「上幸廣南營、閱士馬、尋幸會安舖、因見舖之西有橋、以其地商舶湊集、名來遠橋、御書金匾以賜之、云云」（前編卷八己亥二十八年三月の條）とあり、說明によれば橋の中央北側に掛かる朱面に金文字で來遠橋と書いた額が彼の筆になり、その左下の署名はよく見えぬが彼の佛名だとのことだ。この額の後、卽ち橋の中央北側に間口七米、奧行六米半のパゴードが附屬し、玄武神を畫いてこれを祀つてゐる。先の案內記に北帝をまつるパゴードとあり、大南一統志廣南省の祠廟の所に、「眞武祠在來遠橋、北與會安舖相近」とあるのは之であらう。兩三回の改修によるとはいへ、昔もつてゐたと言はれる日本的な俤を止めてゐないのは何だか寂しい樣な氣がする。珍客の訪づれに土人が集つてきて我々の後にぞろ〳〵と隨ふ。碑は上記東北隅の外、門を入つた西南、西北、東南の各隅にあり、殊に西南隅のものは、漢文と佛文との銘を有し、これらは啓定二年（一九一七年）の改修の際に立てられたものである。今試みにギルミネ氏より贈られたコピーによつて西南碑の銘（漢文）を記すと、

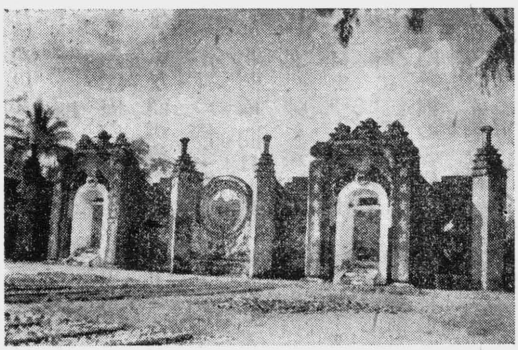
フェフォ日本橋の內部

本社爲銘、於維新乙卯陸月日　承

貴座準出銀　元、飭行修補來遠前橋、辰承
貴座正公使大人
貴工政座官大人
主行其事、丁巳年六月日工竣、本社感恩不忘、
爲此銘、誌以垂永久、茲銘
啓定二年七月吉日　明鄉社本社同敬銘
工政通事　陳世衍
陳玉桂

とあり、以下西北のものは明鄉社所屬の官員・鄉職並びに一般社內人、東南のものは同じく五幇（福建・廣東・潮州・琼府・嘉應）幇長を始めとする幇內諸店舗諸商人の金員寄附者の名前を列ね銘したものである。

明鄉社はフェフォを構成する社の一つで、十六・七世紀の頃こゝへ貿易に來た支那の商人が創めた支那人部落に淵源し、古くは明香社と稱してゐた。明鄉・明香は共に Minh Huong で同音である。當時明香社はフェフォ川の北岸に沿ふ一小部落にすぎなかつたが、その後彼等が定住し、遂に土人と婚を結ぶに及び、支那・安南の雜種人、今日のいはゆる明鄉を生ずるに至り、また社の地域も著しく擴大した。この社の地域の擴大は Nguêu-Thiên-Lân 氏の研究によると、フェフォ川のもたらしたデルタの堆積が主なる要素をなすとゝ。(La Formation et l'évolution du village de Minh Huong (Faifo). Bulletin des Amis du Vieux Hué 1941) 尙こゝに一言すべきは明香社の社名であるが、これは必ずしもこゝのみに存するのでなく、他地方にも見られるが、何れも佛印に發展した華僑の部落であり、他に同じく清河社なるものが存することから見て、恐らく彼等がその故國明・清等の名をとつて己の社名に冠したものであらう。この日本橋と附屬のパゴードは、右の如く明鄉社々員の屢次の修造によつて今日に至つてゐるが、こ



フェフォの天妃祠の表門

のパゴードに祀る北帝は彼等の守護神であり、少くとも日本町衰滅以後のこの日本橋は彼等明鄉の橋と言つても差支ないのである。豫定の時刻が切迫してゐるので急いで橋を辭去、一先づ理事官邸に引き上ぐ。

○

午後二時再び案内に連れられて一同林天后を祀るパゴードに至る。之は稍變つた且つ立派なパゴードで最近の修造である。表に明鄉社、重興啓定七年（一九二二年）歲次壬戌五月吉日本社重修とあり、間口廣く、二門を有し、珍しい裝飾が施されてゐる。門をくぐると中は畑になつて居り、奥に祠殿がある。前掲大南一統志に、天妃祠在延福縣會安明鄉社、祀天妃林氏とあるのがこれであらう。嗣德元年（一八四八年）春三月の建立である。天妃は言ふまでもなく海神で、之またこの地に來て商業貿易に從ふ支那商人が海路の安全を祈つてたてたものであらう。空が急に暗くなり、また豪雨が一しきり來、さうになつたので、案内の人に禮を述べ、再度思ひ出の日本橋を通つて一路ツーランに歸る。

バンタイ・スレーの見學

本誌八卷一號の拙翁は西貢出發前の極めて慌しい中に筆を執つたため、二三誤り記して訂正に及ばなかつた所があるのは申し譯ない次第であるが、この文中アンコール見學の所にバンタイ・サムレー云々とあるのはバンタイ・スレー（Banteay Srei）の誤りである。バンタイ・スレーの見學はアンコール滯在の第三日に行つた。當日朝早くシェンレアップ（Siemreap）の宿舍を出發。この日の案内には考古學の老大家パルマンティエ翁が親ら當つた。これまでアンコール・トムやワットを始め他の諸遺蹟の案内には翁のついて來たこともあるが、主としてコンセルヴァタゥールのグレーズ氏が案内役であつたことから見ても、この遺蹟の價値と翁の得意さがうなづかれると思ふ。バンタイ・スレーはシェンレアップ川（Stung Siemreap）の右岸、アンコールの東北約二十一粁、新泰・佛印國境線たる北緯十五度線の稍〻北にあり、卽ちこの部分のみは少し泰

側に出張つてゐるわけである。勿論車によらなければこの見學は日歸りには不可能であるし、國境地帶で、現今では訪問に特別の許可を要し、その上附近は屢〻盜賊が横行するさうで、可成り物騷なのであるが、佛印側の好意で途中より執銃の兵隊一名を同乘させ無事見學を果すことが出來た。併し往復の道は自動車の走るには餘りにも惡く軍の動搖は申すに及ばず、砂中に車輪が沒して附近部落の土人の應援を得て辛うじて引き上げたことも一度ならずあつた。

併しこの素晴らしい遺蹟の見學は往復の苦しみを償つて餘りがあつた。遺蹟の少し手前で車を下り、熱帶林の間を通ずる小徑を約二町程進む。パルマンティエ氏は七十三歳の高齢にも拘らず至極元氣で一行の先頭になつて進んで行く。遺蹟の規模やその樣式等の詳細については私の如き門外漢に云々するの資格はなく、遠東學院から出てゐる報告書の類を見られゝばよいが素人目にも小じんまりとしてアンコール・ワットの樣な雄大さを有たぬとは言へ、その浮刻はより寫實性に富み、手法に至つては實に纖細緻密、巧妙を極めて居り、眞に感嘆に堪へぬものがあつた。アンコール・ワットが人口に膾炙してゐるに對し、この遺蹟については從來一部の者以外には殆んど知られてゐないが、これは發見が最近であるのと、特にその位置が遠隔で、交通が不便である等によるものであらうが、これからは折角アンコールを訪ふ人士は都合のつく限り、こゝへも行つて見られるがよいと思ふ。この殿堂の創建についてははじめ諸學者によつて色々の說が唱へられてゐたが、その後明確に九六七年のデートを示す碑銘の發見により、この論議は一應終結を見た由である。それにしても、この遺蹟の復興に力を盡し今日あらしめた遠東學院關係者の功績は沒することが出來ない。

（藤原記）